

あとがき

リルケはこう言いました「ポエジーから予言までかけぬけたものは偉大である」と。

私には幾つかの予言詩がある。詩集『別情歌』は妻と私の前世の悲恋物語だから、予言詩ではないが、過去の透過詩だ。これを書いた翌年、昭和二十二年四月に詩集『水晶宮』を書いた。書いたというより、一文字一文字を眼前に見せられ、それを筆写しただけ。今まで文学だと思っていたが、最近に至りこれは実在する地球空洞世界の描写ではないかと理解した。だから予言詩だ。

また、この詩集『アオミサスロキシン』、書いた本人に全く訳の分からない詩。でも文学的に面白そうだから、詩集にして平成6年に手作りの詩集にして出版した。増刷までしたから大分売れた。最近になりこれは予言詩だと確信した。蛙が語る人類の未来、大災害を経て、三分の一人の人が残り（人の $\frac{1}{3}$ ではなく、三種類の中の一つの人のみが生き残り）、パラダイスに似た新地球を形成する。地球は銀河系の中の梃子になる筈。つまり、この銀河系の肅清・進化の希望の星となる。換言すれば、宮沢賢治のユメ（世界ぜんたいの本当の幸福）が、現実化するかもということ。

少し、性急な話に聞こえるかもしれないが、これまでの地球が、どうも、この詩のように展開しているから、未来の地球はこの詩のような顛末になる筈。だから、これは予言詩。

平成6年（1994年）に、東京神楽坂の教育会館で、数人で朗読して公開した。だが、まだ時期尚早で以後中断。今回「ナレーション」を付記して出版すると共に、チャンスがある毎に、これを複数の人で朗読して公演したいと思っている。時節が来たのだ。（公演を重ねることで、この詩の結末、黎明の出現がより確かなものにされる。これが「癒し」の真義である）。但し朗読者はみな素人（詩人でも、朗読家でもない）。ただ、私の主張する（テクノボー朗読法式）の遵守者。つまり癒し（聞く人、まわりの万象の浄化・進化に寄与）を目的としている。

さて、私の詩がもし予言詩ならば、リルケの言葉に従うと、私は偉大なのだろうか？ と、とんでもない、ほんのたどたどしい詩の書き手であると、自認している。但し、「癒さない芸術は、芸術ではない」と確信している。癒し（人の魂⇨精神の進化、万物の浄化）に逆行するいわば芸術が、お金と名声を得て巷に氾濫していないだろうか。私は問う「戦争をする（野獣のような）人類社会に、貴方の詩は貴方の芸術は、何らかの進化・浄化の寄与をしているだろうか」、自戒のためにも何度でも問う。

二〇二二・八・二四

桑原 啓善

（ペンネーム）
山波言太郎